

優秀演題抄録

1 Aid for Decision-making in Occupation Choice for Hand を用いて、麻痺手使用のイメージを明確化したことにより、麻痺手の使用頻度と質の向上を認めた事例

【演 者】植田 葉月 【所 属】いちほら病院

【共同演者】小山 貴士（作業療法士）、渡辺 新（医師）、四津 有人（医師）

【キーワード】イメージ、ADOC、行動変容

【はじめに】

右被殻出血により左片麻痺を呈し、麻痺手の使用頻度と質の低下を認めた事例を担当した。AidforDecision-makinginOccupationChoiceforHand（ADOC - H）を用い、麻痺手使用のイメージを明確化したことにより、麻痺手の使用頻度と質の向上を認めたため報告する。尚、報告にあたり事例の同意を得た。

【事例】

50 歳代男性、右利き。右被殻出血を発症し、前医で保存的加療後、24 病日目に当院に転院となった。

【初期評価（24 病日目）】

Brunnstromrecoverystage（BRS）：左上肢Ⅴ、手指Ⅴ。日常生活活動（ADL）は T 字杖歩行で見守りレベル。軽度の注意障害と左身体認識の低下を認め、日常生活で麻痺手はほとんど使用していなかった。麻痺手に対し「使えない手」と話した。

【HOPE】

左手が使えるようになりたい。

【経過】

[25 病日目～] 日常生活での麻痺手の積極的な使用を口頭で促したが、変化は見られなかった。[32 病日目～] 事例は「左手が使えるようになりたい」と話すも、その具体性に欠けていた。麻痺手使用のイメージを明確化するため、ADOC - H を用いた。麻痺手の使用場面としていくつかの項目が挙げたが、事例の優先度が高く、実施頻度の多い「お椀を持つ」に着目した。食事を再評価すると、麻痺手は大腿上に置かれ、ほぼ使用していなかった。使用の意識づけと習慣化のために、まずは麻痺手を机の上に載せることを確認し、共有した。作業療法（OT）ではお椀の形状に沿って手を添えること、机上や大腿上でのお椀の把持を練習した。[39 病日目～] お椀の机上や大腿上での把持が安定してきたため、空間保持の練習を開始した。「いろいろな器を持ってみた」と自ら麻痺手の使用方法を検討する言動があった。[46 病日目～] 外泊後には、「陶器は重そうだから、軽い器に変えてもらった」との発言があった。OT では様々な材質や形状の器を用いて練習した。[72 病日目] 自宅へ退院。汁椀の空間保持に課題が残ったが、「できるようになるまでお風呂で練習する」と話した。

【最終評価（72 病日目）】

BRS：上肢Ⅵ、手指Ⅵ。ADL は独歩で自立。麻痺手の使用頻度と質の向上を認めた。麻痺手に対し、「お利口な手」と話した。

【考察】

事例の麻痺手の使用頻度と質が低下していた要因の 1 つとして、麻痺手使用のイメージが不十分であり、不使用の学習が推察された。手の使用場面が詳細に提示されている ADOC - H は、事例にとって麻痺手使用のイメージを明確化しやすかったのではないかと考える。さらに、事例の優先度が高く、実施する頻度の多い食事に着目し介入を行ったことで、麻痺手使用の習慣化や意識づけに繋がり、使用方法を自ら検討するなど行動変容が得られた。そのことで、麻痺手の使用頻度と質が向上し、麻痺手への認識が変化したのだと考える。